



今年度からスタートした IBM 健保組合のデータヘルス計画について、柱である主な健康課題とそれに対する対策・事業内容について毎号ご紹介していますが、今回は、新生物(主にがん)医療費が増加していること、被扶養者のジェネリック(後発医薬品)使用割合が低いことなど、早期発見の大切さや医薬品に関する啓蒙の必要性を取り上げます。

新生物(がん)医療費が依然、増加傾向に



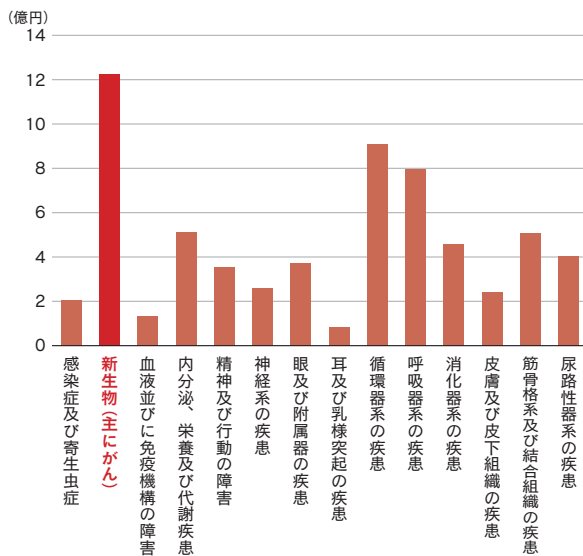
とりわけ乳がん、大腸がんが著しい伸びを示す。

がんを中心とした「新生物」の医療費は毎年増加傾向にあり、医療費全体に占める割合もすべての疾病の中で群を抜いて高くなっています。なかでも伸びが著しいのが、乳がん、大腸がん、それに肺がん(気管・気管支を含む)です。2014年は特に乳がんの伸びが大きく、前年最も高かった大腸がんを抜き、過去最高の水準となりました。これら新生物の医療費を抑えることが、医療費全体の伸びを抑制することにつながるといえます。

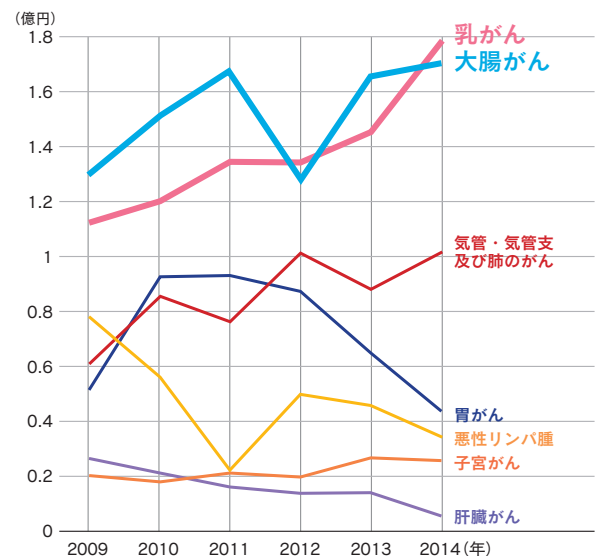
なお、医療機関への受診者数(患者数)をみると、やはり乳がん、大腸がんが多く増加傾向にあります。2014年には大腸がんが急激に伸びてトップとなり、乳がんに比べると医療費よりも人数が多くなっているといえます。また、胃がんは、医療費水準はそれほど高くない人数の多い傾向が続いています。



主な疾病分類別医療費(2014年)



主な悪性新生物(がん)の医療費の推移

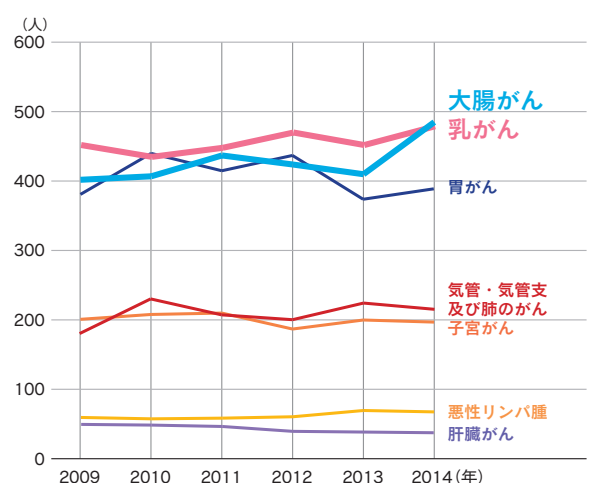


対策の方向性・実施計画

早期発見や予防行動に結びつく啓蒙活動の実施

IBM 健保組合では毎年、加入者を対象にレセプト分析やアンケートにより疾病傾向、医療費との関連、生活習慣の状況等をまとめた健康白書、疾病白書等を作成していますが、これをさらに充実させて広報活動等に活かしていくとともに、オプション検診によるがん検診の受診率向上を図り、がんの早期発見や予防行動の促進につながる事業を促進していきます。さらに、2015年度からIBM 健保組合は「がん対策推進企業アクション パートナー団体」に登録しており、がん対策を進める上で最新の情報が得られる体制となりました。

主な悪性新生物(がん)の医療機関受診者数の推移



低水準が続く 被扶養者のジェネリック使用割合



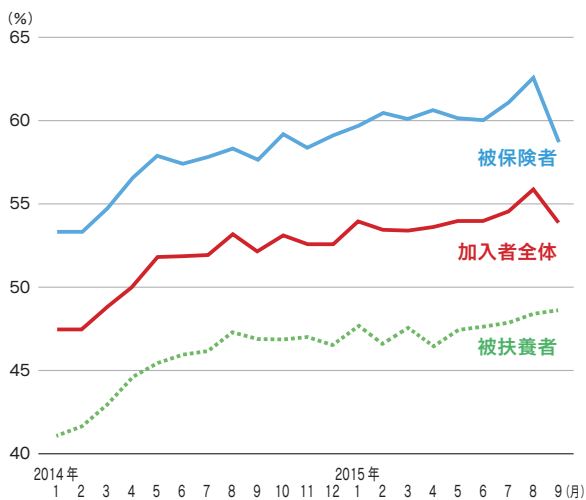
60歳以上を除く一人当たり調剤費が、被保険者を上回る要因にも。

ジェネリック医薬品（後発医薬品）のメリットについては「My Health」でもたびたびお知らせしてきましたが、国として積極的に推進していることもあり、その使用割合は毎月増加しつつあります。ただし、被保険者に比べると、被扶養者のほうが低い状況が続いており、全体の使用割合を上げるためには被扶養者の方に積極的にジェネリックへの切り替えを行っていただく必要があります。

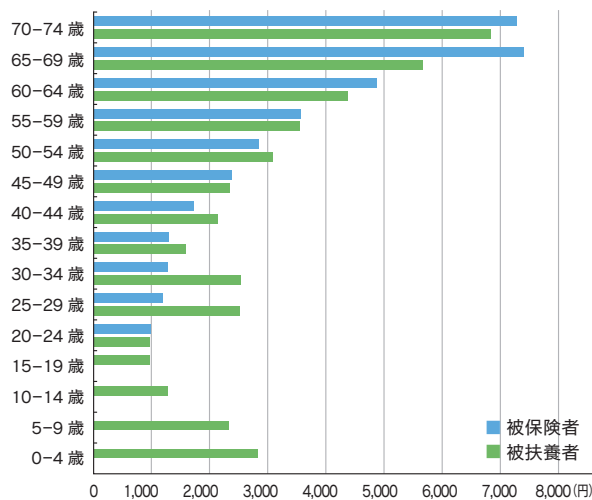
ます。

なお、一人当たりの調剤費（処方薬代）をみると、健保組合加入者の多くを占める20～50歳代のほとんどの年齢層で被保険者よりも被扶養者のほうが高くなっていることから、この年代の被扶養者がジェネリックに切り替えていただければ、調剤費の削減効果はより大きくなるといえます。

ジェネリック医薬品の使用割合の推移



年齢階級別加入者一人当たり調剤費(2015年9月分)



対策の方向性・実施計画

すこやかサポート Plus を活用したジェネリック医薬品の啓蒙

2015年度から稼働している「すこやかサポート Plus」は被扶養者も利用できるようになったため、そのメニューの一つであるジェネリック通知（後発医薬品差額通知）を積極的に活用し、情報提供を行います。特に、効果の高いと思われる医薬品を選択して対象者に使用を促進する通知を行うなど、ジェネリック医薬品への切り替えを促していきます。

なお、調剤費が高い傾向にある高齢の被扶養者に対しては今後、個別の働きかけも検討していきます。



保健スタッフだより

健診結果から生活習慣を見直すために 保健指導をご活用ください！

健康診断後、「大きな生活の変化がないのに健診データが悪化した」というお声を耳にすることがあります。

現状の生活要因と健診結果との因果関係はどうか。そのことについて知って、対策をとることが将来の健康を守る第一歩です。健診後、必要な方には各種保健指導のご案内をお送りしております。

ぜひ、保健指導をご活用ください。

